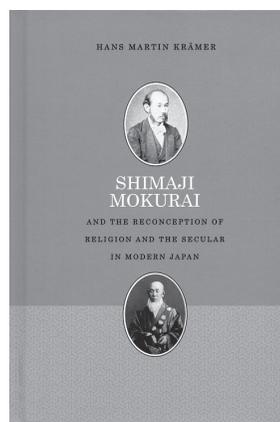


ハンス・マーティン・クレーマ 『島地黙雷と近代日本における〈宗教〉と〈世俗〉の再概念化』

Hans Martin Krämer, *Shimaji Mokurai and the Reconception of Religion and the Secular in Modern Japan.*

ミック・デネツケル



University of Hawai'i Press, 2015.

ハンス・マーティン・クレーマの新作は、浄土真宗の僧侶、島地黙雷（一八三八―一九二二）の知的遺産に関する、英語で書かれた最初の研究書である。先行的な言及としては、ケテラー（Kettler 1990）が、明治仏教に果たした黙雷の役割の重要性について海外の歴史家に対して注意を喚起したものの、ジョセフソン（Josephson 2012）とマキシシー（Maxey 2014）が、十九世紀の仏教思想に関する議論を再開する中で、黙雷にふたたび照明を当てたものがある。ジョセフソンが、トランスナショナルな仏教の再解釈をテーマとした出版を予告したとき（Josephson 2012, p. 323, n. 14）、黙雷に関する研究書が早晚現れるであろうことは感知できた。実際、クレーマの本研究が扱っているのは、近代日本における宗教の、そして仏教の「再概念化」の問題である。彼は「近代日本において

〈宗教〉がどのように構想されるかを決定つけた三本の糸」として、「土着的伝統」と「当時の政治的課題」とともに、「西洋との接触の中から吸収した新知識」を挙げている。そしてこれらの「三つの糸が決定的な歴史的時期（一八七〇年代初期）に撚り合わされた」（pp. 137-38）人物として、黙雷に着目しているのである。

序論では、本書の中心的テーマ——「近代日本において〈宗教〉がどのように構想されたかを理解すること」（p. 3）——が明確に解説されている。第一章では、「religion」の訳語としてなぜ「宗教」が定着したのかを説明しようとして、「宗」と「教」の語義史について価値ある洞察が披瀝される。続く二つの章では、近世の日本において、仏教やキリスト教といった異質のものに対する包括的概念として「宗」（*secular* の意味）を適用したことが、はたして「近

代ヨーロッパで「religion」が意味するようになったものに近い、社会的・文化的生活上の抽象的な実体を表す新しい概念範疇の創設に向けての「第一歩」(p. 41)になったのかどうかという問題が検討されている。第二章ではまた、「明治初期に、政治的・社会的環境の変化は諸概念の変化に反映したが、同時に、諸概念の変化が政治・社会の変化に影響した」(p. 43)ことが詳しく論じられている。第三章では、概念史の観点から〈宗教〉という用語が検討されている。黙雷が宗教を、「政」に対する対極概念としてではなく、「治教」(civil teaching)の対極概念として構想していたというクレーマの指摘は重要である。というのは、「宗教と治教の区別は、神道の問題と結びついた、純粹に日本的な問題」(p. 48)であったからである。それは、日本が近代的宗教概念を発達させていく上での、当事者となった日本人の所為と日本の社会的諸事情から来る要請を浮かび上がらせてくれる歴史の要なのである。

第四章は、西本願寺派の海外教状視察と、その中の黙雷の役割を扱っている。レオン・ド・ロニー、エミール・グスタフ・リスコとの出会い、またエルネスト・ルナンの著作が黙雷の〈宗教〉の理解にどのように影響を及ぼしたかについて詳細に分析されている。ただ、黙雷がドイツで出会った神学者がリスコであることを突き止めたのは本書が最初であるとクレーマは主張しているのだが (pp. 97-98)、これについてはすでに指摘が存在している

(Danckere 2014)。また、黙雷はロンドンで、明治の政治家の木戸孝允、外交官の青木周蔵と〈宗教〉について語り合い、日本はキリスト教を禁止し仏教を国教とすべきであるという結論を下しているのだが (Breen 1998)、その経緯に触れられていないのは解しかねる。その結果、「一八七二年以降、著述に現れ始める、黙雷のキリスト教に対する驚くほど肯定的なイメージ」(p. 109)という首を傾げざるをえない評言が出てくることになる。黙雷の後期の著作を精査してみれば、黙雷がキリスト教に次第に批判的になっていく様子が窺えるはずだ。さらに再検討を要するのは、〈宗教学〉の起源について、たとえば石川舜台の果たした役割が看過されていることである。石川は、東本願寺派の海外教状視察団の一員であったが、一八七五年には夙に「science de religion」——彼はこれを「宗教学」と翻訳しており、たぶんこれが「宗教学」という用語の濫觴らんしやうになつている——の研究の必要を説いている。

最終章は〈世俗〉の概念化についての考察である。しかし、〈世俗〉(世俗化)〈俗化〉といった言葉の語義変遷の議論が、黙雷の〈世俗〉の概念化とどう関係しているのかはつきりしないし、黙雷の思想が、他の思想家たちの〈世俗〉や〈世俗化〉の概念をどう助長したのかというあたりも明らかではない。村岡典嗣や丸山眞男の〈世俗化〉に対する理解の分析の箇所に至って、黙雷の〈世俗〉概念構築との関連がやや見えてくる。村岡と丸山は、徳川時

代の仏教が衰退したのは、仏教自体が世俗化したためであると考
えているのだが、こうした考えは、そもそも黙雷たち明治の思想
家たちによって「仏教が一八七〇年代初期に宗教として堅固に確
立された」(p. 256) という事実を前提として初めて成立するから
である。本書の結論部を読むと、西洋と非西洋の思想家たちが相
互を意識し合う十九世紀の世界的な営為の中から〈宗教〉という
概念が形成されてきたことに改めて思いを致される。しかし、黙
雷が「こうした動向において重要な役割を果たし、近代にふさわ
しいカテゴリーとしての〈宗教〉を打ち立てる先駆者の一人」
(p. 154) であつたことは確かであつても、黙雷と浄土真宗派が、
〈宗教〉の議論において「最も大きな影響」(p. 2) を与え、「黙雷
の活動は、一八七〇年代の国家的な政策に直接反映された」(p. 15)
というクレーマの主張を裏付ける事実の提示はほとんどなされて
いない。

語義変遷を辿る手法により、「歴史的な重要人物が〈宗教〉という
概念を当時の言語でどのように表現しているか」(p. 5) を、言葉
を構成している「一つ一つの漢字がイメージ的に表しているもの」
(p. 1) を細かく分析する研究でありながら、本論のテキストから
漢字表記を排除してしまったのは不幸なことだった。最後にもう
一言、著者が頻用する「再概念化」(reconception) という言葉につ
いてだが、これは〈宗教〉なり〈世俗〉なりの概念がすでに存在

していたことを前提とするものであり、日本では〈宗教〉や〈世
俗〉といった近代的概念は十九世紀半ばにやつと形成されたもの
である以上、「概念化」(ないし「造語」) といった用語のほうがあ
さわしいと思われる箇所がいくつか見られた。しかしそれはそれ
として、クレーマによる〈宗教〉と〈世俗〉という二つの概念と
その用語法の分析に基づいた歴史学的研究は、さまざまな分野の
研究者に知的刺激を与え、日本(さらには日本以外の国々)におけ
る宗教関連用語の歴史と翻訳についてのさらなる研究を促すに相
違ない。本書に補遺として付されている黙雷の「三条教則批判建
白書」の英訳は、日本研究の学生・研究者が、この日本思想史上
の重要テキストにアクセスする道を拓いた。クレーマは、黙雷を
「近代アジア全体を包摂する仏教の改革運動を率いた傑出した人物
の一人」(p. 15) として位置づけている。この刺激に富む主張は、
それに対するさらなる論証を求めるとともに、黙雷という重要人
物についての一層の研究を促すと思われる。

(翻訳・南谷覚正あきまさ 翻訳家)

参考文献

Breen 1998

John Breen, "Earnest Desires: The Iwakura Embassy and Japanese Religious Policy,"
Japan Forum 10:2 (1998), pp. 151-65.

- Deneckere 2014
- Mick Deneckere. "Shin Buddhist Contributions to the Japanese Enlightenment Movement of the Early 1870s." In *Modern Buddhism in Japan*, ed. Hayashi Makoto, Orani Eichi, and Paul L. Swanson. Nanzan Institute for Religion and Culture, 2014. pp. 17–51.
- Josephson 2012
- Jason Ānanda Josephson. *The Invention of Religion in Japan*. The University of Chicago Press, 2012.
- Ketelaar 1990
- James E. Ketelaar. *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and its Persecution*. Princeton University Press, 1990.
- Krämer 2013
- Hans M. Krämer. "How 'Religion' Came to be Translated as *shūkyō*: Shimaji Mokurai and the Appropriation of Religion in Early Meiji Japan." *Japan Review* 25 (2013), pp. 89–111.
- Maxey 2014
- Trent E. Maxey. *The "Greatest Problem": Religion and State Formation in Meiji Japan*. Harvard East Asian Monographs 365. Harvard University Press, 2014.

* 本稿は *Japan Review* 29 (2016) に掲載された英文テキストの翻訳である。